

多くの命を救った「人道の港」

敦賀港

It looked like heaven, too

西村亮祐

<取材先>
敦賀港、敦賀ムゼウム
<参考文献・写真引用>
『人道の港 敦賀』/日本海地誌調査研究会
『命のビザで旅した子供たち』/高橋文
『命のビザ、遙かなる旅路』/北出明
『七つの海で一世紀』/日本郵船株式会社

福井県の中央に位置する敦賀市。海の玄関口となつて、海防の要衝として、海軍の基地となつてきた。敦賀港には1900年代に難民を二度、受け入れた歴史がある。私は「人道の港・敦賀港」を訪れ、人々の命を守つた船と港を探った。

船と鉄道の敦賀港

敦賀港は天然の良港だ。歴史は古く、平安時代前期は渤海との交易のために「松原客館」が置かれた。戦国末期には東北地方や北海道・千島との交易港として栄え、千石船が往来、豪商が生まれた。江戸時代には北前船が寄港する。

1882年、京都と敦賀間に鉄道が開通すると港はさらに活気づく。1892年には、北前船船主だった大和田莊七が大和田銀行を創立する。二代目大和田莊七は港湾整備に力を尽くし、1899年、敦賀港は国際貿易港となった。

船と鉄道の連携が敦賀港を世界の波止場へと変えていく。1906年、ウラジオストクと敦賀の間を週二回、定期船が航行。1912年には定期船に連絡する欧亜国際連絡列車が新橋（東京）と金ヶ崎（敦賀）間で運行する。

こうして、鉄道で東京から敦賀へ、連絡船で敦賀からウラジオストクへ、さらにシベリア鉄道を使ってヨーロッパ各地へ旅をする路線が確立された。

これが後に、ポーランド孤児やユダヤ難民を助ける手立てとなる。

2025年の

敦賀港
／自分で撮影



★敦賀港



敦賀市
福井県

日本とポーランドを結ぶ船

20世紀初頭、シベリアでは戦争で親と死別したポーランド人の子ども（ポーランド孤児）が多く発生した。1919年、ウラジオストク在住のポーランド人アンナ・ビルケウイチさんを中心に児童救済会が結成されるも、戦争により活動の継続が難しくなる。児童救済会は、ロシア革命でシベリアに出兵していた日本に孤児の救済を嘆願する。

これまで歴史的にあまり関わり合いがなかった日本とポーランドだったが、要請を受けた日本赤十字社は異例の速さで孤児救出作戦を開始した。

こうして、1920年7月22日の筑前丸を初めとして、1921年7月6日まで、計五回にわたり375人の子ども達が敦賀に上陸した。

その後、ソビエトとポーランドが停戦になると、救済会はシベリア鉄道を使った救出を行うが、飢餓や疾病が発生。蒸気船を使って安全に子ども達をポーランドへ運ぶため、日本による二回目の救出活動が始まる。1922年8月7日の明石丸を初めとして、計三回にわたり、子ども達と付添人が敦賀へ上陸した。

敦賀上陸後、ポーランドへの船が準備できるまで日本に滞在していた子ども達に対して、全国から多くの寄付が集まり、無料で散髪や歯科診療の申し出もあった。

第一回救済の子ども達は、1920年9月28日に横浜港から伏見丸でアメリカを経由してポーランドへ輸送。その後翌7月8日まで六回に分けて輸送された。第二回救済の子ども達は、神戸港から1922年8月25日の香取丸と9月6日の熱田丸に乗船。船はシンガポール、コロンボなど各寄港地で歓迎されて、楽しい船旅になったという。日本人の乗組員達は、子ども達が眠りにつくと毎晩寝室を巡回して毛布を首までかけ直し、額に手をあてて発熱がないか確認した。後に孤児は、それが嬉しかったことを語っている。

その後、香取丸は10月17日、熱田丸は10月27日にロンドンに到着。そこからイギリス船に乗り換えて1922年11月にポーランドの港であるグダンスクに到着した。当時11歳だった少年ヘンリックさんは、長い旅を終え、初めて目にする祖国ポーランドに幼心ながらも感涙したことを語っている。

／エピソード『Dzieci syberyjskie シベリア孤児』松本照男、ヴィエスワフ・タイス

また、ポーランド孤児の子孫であるエヴァさんは2024年来日し、敦賀港を訪れた。テレビの取材に対して「ここに父がいたと思うと感動して泣きそうです。父はシベリアで育ち初めて敦賀にやってきた時に『天国だと思った』と言っていました」と、目を潤ませた。

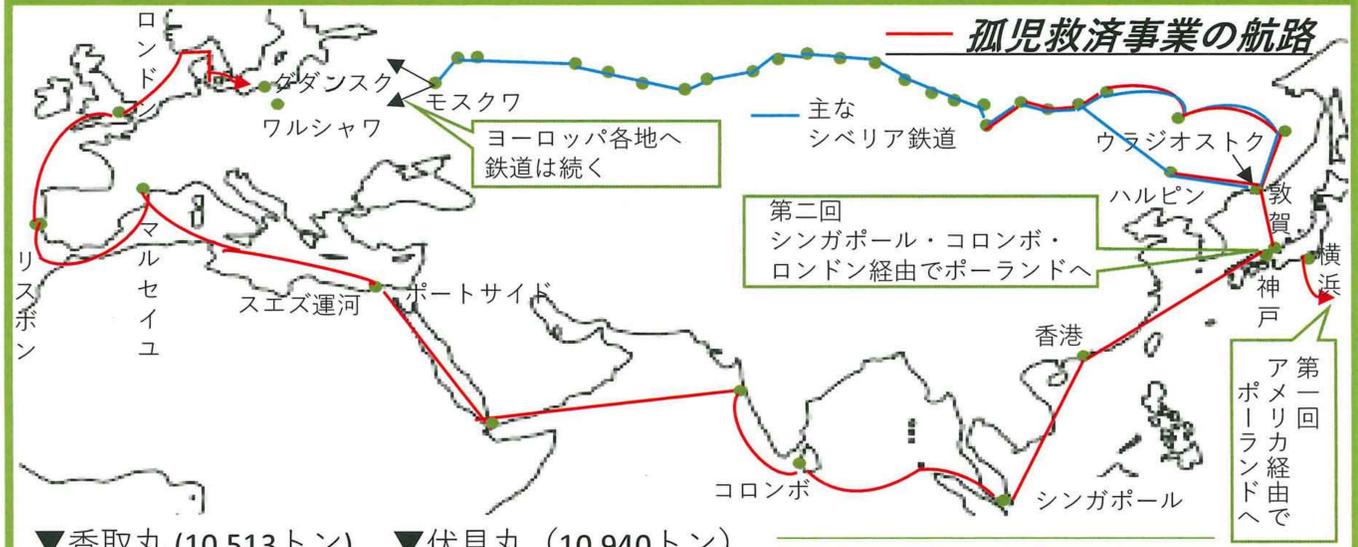
1920年から1922年にかけて、日本の船は合計763人の子ども達を救うことができた。

ご当地グルメ福井のソースカツ丼は、船と鉄道が運んだヨーロッパ料理！

高島増太郎さん（福井県出身）は、1907年からドイツで料理を学び、ドイツの薄いカツ料理「シュニツェル」をソースで味付け、ご飯に載せて「ソースカツ丼」を考案した。私が2025年8月に訪れたドイツ、ポーランドでもシュニツェルが出た。（写真、左）右は若狭湾観光連盟公式サイトでの福井ご当地グルメ、ソースカツ丼。見た目がそっくりだ。



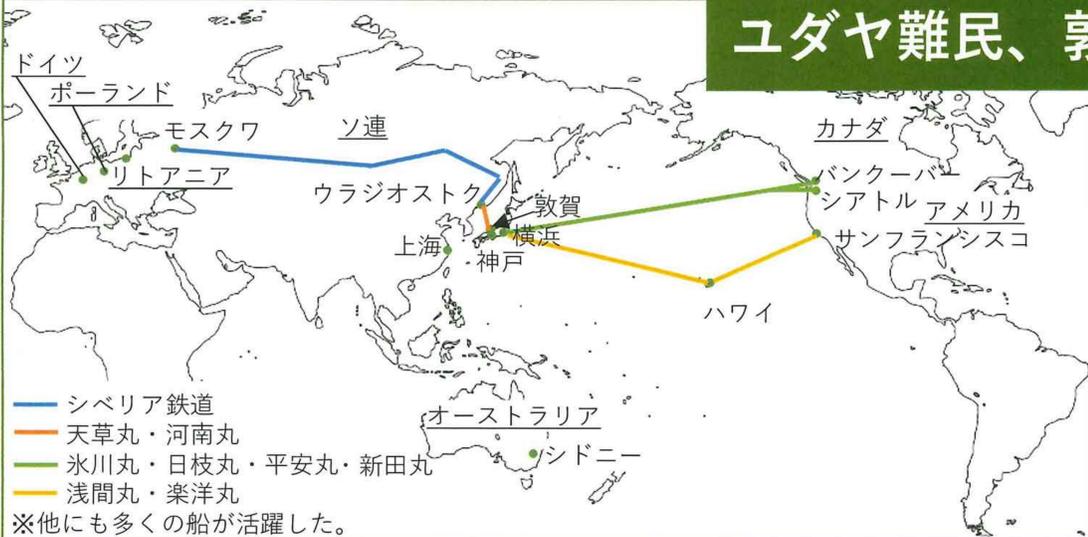
（上）ポーランド孤児が上陸した頃の敦賀港
（下）神戸港からポーランドへ帰国する子ども達
／写真『人道の港 敦賀』



伏見丸はこの後も人々を救う。1941年1月、戦禍のロンドンから最後の引き揚げとなった邦人158人を乗せ、大西洋を突破し横浜に入港した。
／写真『七つの海で一世紀 日本郵船創業100周年記念船舶写真集』

ユダヤ難民、敦賀上陸

1940年7月18日、ユダヤ難民は身の安全を守るため、ビザを求めてリトアニア・カウナスの日本領事館へ殺到。杉原千畝領事代理は、日本を經由し、第三国へ入国できるようにビザを発給する。これによる「杉原リスト」最初の敦賀到着は1940年8月10日であった。以降、1941年6月14日入港の河南丸まで、船は多くのユダヤ難民を運ぶ。ユダヤ難民は敦賀を経て、第三国へと渡った。



敦賀港の先も、真心を

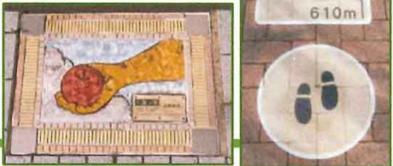
敦賀港に降り立った後のユダヤ難民は、神戸や横浜の港へ移動し、そこから再び船でカナダ・アメリカ・オーストラリアへ向かった。その際に活躍した日本の船は、「サービスが良かった」「食事がおいしかった」と評判だ。下段の写真はアメリカへ向かう新田丸の船内だ。紅白の幔幕、ぼんぼり、桜の造花を飾り、ござに座って食事をいただく日本スタイルの宴会を提供している。また、サンフランシスコ行きの楽洋丸でコックをしていた今村繁さんは、当時、ユダヤ難民約200人の食事を作った。やせ細った人々を見て、船上での食事を消化の良い

敦賀港へ上陸したユダヤ難民の記録

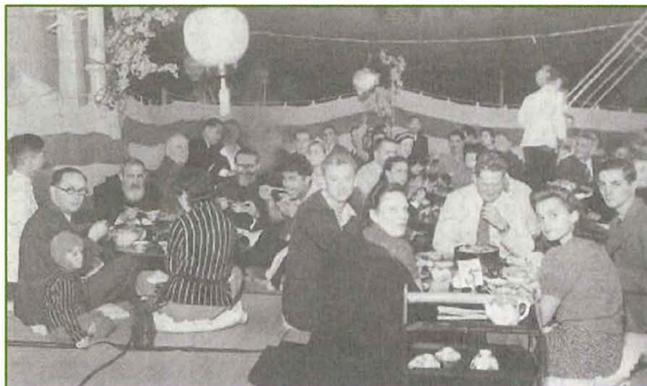
★少年だったマルセル・ベイランドさん
「日本の船は、なにごともなく一晩で私たちをウラジオストクから敦賀まで運んでくれた。それは単に、ある国からとなりの国へ移ったということではない。季節の変化、別の世界へ移動のような。」／自著『三輪車の少年』
また、少年だったマルセルさんは神戸で初めて食べた焼きそばが大好きになったそうだ。

★妊婦だったドラ・グリーンバーグさん
テレビの取材に対し、敦賀のことを「私と私の子どもの人生が生まれた場所」であるとして、「It looked like heaven.」と語る。

★地元の青果会社の家族がユダヤ難民にリンゴを配った記録がある。敦賀港のユダヤ難民上陸地点の地面には、リンゴの絵がはめ込まれていた。その他、港周辺にはユダヤ難民の足跡をイメージしたピクトグラムがあった。



▼楽洋丸 (9,419トン)



物に変え、到着までの二週間、乗客の体調に気を配った。すると船が到着する直前に乗客代表者がパーサー（船の接客係）のもとへ感謝の気持ちを伝えにきてくれたという。「真心は伝わるものなのでですね。」と今村さん。いつの時代も、船員達は温かい心で乗客に寄り添っていた。／写真・エピソード「命のビザ、遙かなる旅路」

新聞で発見!

ミナトツルガの世界性

1940年代の敦賀港の様子を知るため、国立国会図書館で当時の新聞記事を探した。そこでは朝日新聞大阪版で「世界の敦賀」という全三回の特集記事を読むことができた。国際色豊かな港に変容する敦賀港を当時の記事から抜粋して紹介する。

第一回 1941年6月4日

「大見出し」
「外客忽ち三百倍 便船毎に悲喜の国際話題」

「小見出し」
「裏門が表門に」「宛ら世界人種展」等

「敦賀」浦潮間の連絡船もいまや世界の動脈に飛躍した。

「ミナトの変転の波に乗って逆に新しく世界的重要港に飛躍した港の両横綱、遠くポルトガルのリスボンとともに東ではわが敦賀港！」

※浦潮「ウラジオストク」

第二回 1941年6月6日

「大見出し」
「主流は外交官と商人 旅路は侘し落魄のドルと流民」

「小見出し」
「浦潮善隣調」「ユダヤ波の低下」等

「ミナト・ツルガは世界の波止場となりつつあるのだ。」

浦潮と善隣調「良い関係なのは、1941年4月に締結された日ソ中立条約によるものと考えられる。ロシア人が来港している様子は7日の記事にも。」

第三回 1941年6月7日

「大見出し」
「街を彩る「ロシア調」 日本海も狭し大築港の設計」

「小見出し」
「ミナトの世界性」「商業生の露語」「超満員の港」「大築港計画」等

「昔はロシア語だけでよかったのです。がこの頃はドイツ語、英語、できれば満州語、フランス語を知っていないと敦賀の一流の客引きにはなれませんよ。」

某旅館主が語ったように、この港の世

界性が著くなるとともに言葉の方もなかなか忙しい。」

そのため、敦賀商業高校では当時としては珍しいロシア語の授業があると書かれていた。

「数年前の物の動きは三百万円そこそこであったのが昨年はついに一億円台へ迫ったと言われ、この数年で三十倍以上の急増である。」

「船会社でもはるびん丸（5169トン）を、浦潮航路へ、また昔の歐洲メール、最近まで豪州メールだった熱田丸（7982トン）を北鮮航路へと、一流の巨船を新しく配しているが、なお港に積み残しがある有様である。港が小さすぎるようになってきたのだ。」

←敦賀商店街には 四日に敦賀へ到着し、河南丸ロシア語の看板 船上で検疫をうける外国の人々



1941年6月4日



1941年6月6日

編集後記

「It looked like heaven.」を考へる

敦賀港に上陸した避難民達は「It looked like heaven.」と言った。私はこれを知った時、とても嬉しかった。「日本はすごい」と誇らしかったからだ。

しかし、現地で調べるにつれ、その言葉は劣悪な旅路の裏返しであり、命をかけて脱出した人々は敦賀に着くまで「生きた心地がしなかった」ということだったと気付く。

戦後八十年を経て、今なお世界では争いがやまない。真心を持つこと、そうすれば違いは新鮮で、知れば面白く、やがて尊敬する心へ変わる。国や宗教の異なる人々に手を差し伸べた敦賀港の歴史を学ぶことは、現代の問題を考える上でも重要な手がかりになると思う。将来、更に港がにぎわい、敦賀をはじめ各地の港に降り立った全ての人が「It looked like heaven, too.」

と、笑顔で回想できる日が訪れることを想って新聞を発行する。